

京都大学	博士（教育学）	氏名	平山 朋子
論文題目	理学療法士教育におけるパフォーマンス評価と学生の学びに関する研究 —OSCE リフレクション法の開発・拡張とその有効性の分析—		
（論文内容の要旨） 本研究は、医療専門職教育（理学療法士養成）において基礎的な臨床能力を評価するパフォーマンス評価としての「客観的臨床能力試験リフレクション法（Objective Structured Clinical Examination Reflection Method）」（以下、OSCE-R とする）、および、その発展としての「考える OSCE-R」を開発し、そこでの学生の学びの過程を分析しつつ、その有効性について明らかにすることを目的としたものである。 現在、医学部・歯学部・薬学部では、5 年次から始まる臨床実習の前の共用試験として、知識を測る CBT（Computer Based Testing）とともに、客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：OSCE）が実施されている。OSCE は、臨床実習を行うのに必要な基本的臨床能力を身につけているかどうかを判断するための実技試験であり、Harden（1975）によって提唱されて以来、世界的に普及するにいたっている。 本研究で開発された OSCE-R・「考える OSCE-R」は、医学 OSCE を参考にして理学療法版 OSCE を作成し、それに映像によるグループリフレクションを加えたものである。OSCE-R は、〈第 1 回 OSCE→映像によるグループリフレクション（ロールプレイ、教員等によるデモンストレーション、セミナーなどもあわせて実施）→第 2 回 OSCE→映像によるグループリフレクション〉というプロセスで構成されている。「考える OSCE-R」は、さらにその OSCE 課題に臨床推論を意識的に組み込んだものである。総括的評価として用いられる医学 OSCE と異なり、いずれも、形成的評価としての機能をもたせた点に特徴がある。 藍野大学医療保健学部理学療法学科では、OSCE-R・「考える OSCE-R」をカリキュラムの中に組み入れ、大学 2 年生・3 年生を対象に計 3 回実施している。本論文では、OSCE-R・「考える OSCE-R」の詳細が論じられるとともに、大学 2 年生・3 年生、ならびに卒業生を対象として、そのパフォーマンス評価としての有効性が、OSCE 得点、リフレクションシート、OSCE-R 後・臨床実習後・卒業後のアンケートとインタビューなどの質的・量的データを収集・分析しながら検討されている。調査は 2007 年度～2015 年度にわたり、特に 2013 年度～2015 年度は縦断的調査となっている。 本論文は、序章、第 1 章「OSCE-R の開発・実施と有効性の分析」（予備調査、研究 1）、第 2 章「『考える OSCE-R』の開発・実施と有効性の分析」（研究 2～4）、第 3 章「OSCE-R			

と『考える OSCE-R』が卒業後の臨床活動に及ぼす影響」(研究 5)、終章の全 5 章(6 つの研究)で構成されている。

第 1 章では、2 年生を対象とする OSCE-R の開発・実施と有効性について、学生が、理学療法士としてのあり方、学習への向き合い方など、主に態度的な面を学んでいたことが明らかにされている。

第 2 章では、3 年生(9 月、3 月)を対象とする、臨床推論を組み込んだ「考える OSCE-R」の開発・実施とその有効性について検討がなされている。その結果、「考える OSCE-R」は、単に実技だけでなく、医療面接から検査測定を選択・実施にいたる一連の臨床推論の質を測定するとともに、各授業科目で得た知識の実践的な意味を考え、それらの知識を統合する学習の機会にもなっていることが示唆された。

第 3 章では、卒業生を対象に、OSCE-R と「考える OSCE-R」が卒業後の臨床活動に及ぼす影響について分析が行われている。その結果、臨床現場において、理学療法の実施中に状況に合わせてリフレクション(reflection-in-action)を行うなど、卒業後の臨床活動にも好影響を及ぼしていることが確認された。

これらの調査結果から、本研究では、OSCE-R・「考える OSCE-R」について以下のような点が明らかにされている。

- ・ OSCE-R・「考える OSCE-R」には、総括的評価だけでなく形成的評価の機能がある。特に映像によるグループリフレクションやロールプレイなどを行うことで、第三者の視点で自己評価し、学生のメタ認知能力や自己調整能力などを育成することにつながっている。

- ・ OSCE-R・「考える OSCE-R」を大学の授業科目と臨床実習の間に実施することで、学生が、これまで学んできた知識を、(模擬場面という制約はあるが)実践的な理学療法の経験の中で再構成することを促している。

- ・ これらの学びを促進するのが、OSCE-R・「考える OSCE-R」に組み込まれているグループリフレクション、セミナー(授業)、ロールプレイなどである。OSCE-R・「考える OSCE-R」を臨床実習前に学内実施することで、失敗が許される模擬的状況下で十分に試行・練習ができること、臨床推論を意識的に用いながら実際の臨床現場により近い状況でのシミュレーションが可能となったことにより、学生の臨床実習、ひいては卒業後の臨床現場への移行がスムーズになっている。

- ・ 2 年次 OSCE-R・3 年次「考える OSCE-R」を、臨床実習と組み合わせて実施することで、リフレクションが徐々に習慣化しており、卒業後も持続している。

以上、本研究では、OSCE-R・「考える OSCE-R」という真正のパフォーマンス評価が映像によるグループリフレクションと組み合わせられ、カリキュラムの中に組み入れられることによって、単に、基本的臨床能力を測定するだけでなく、その育成・向上に向けて学生の学びを促進させる有効な方法となっていることが実証的に示さ

れている。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、医療専門職教育（理学療法士養成）において基本的な臨床能力を評価するパフォーマンス評価としての OSCE-R および「考える OSCE-R」を開発し、ここでの学生の学びの過程を分析しつつ、その有効性について明らかにすることを目的としたものである。

OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) とは、基本的臨床能力を身につけているかどうかを判断するために、模擬的な臨床場を設定して実施される実技試験であり、わが国では、医学・歯学・薬学教育分野で、臨床実習前に共用試験として実施されている。

本研究で開発された OSCE-R は、医学 OSCE を参考にして理学療法版 OSCE を作成し、それに映像によるグループリフレクションを加えたものである。「考える OSCE-R」では、さらに臨床推論の要素が拡張され、より真正性の高いパフォーマンス評価となっている。調査は 1 学年約 80 人の学生を対象に、2007 年度～2015 年度の期間、継続的に実施され、特に 2013 年度～2015 年度は縦断的調査として行われた。また、OSCE 得点、リフレクションシート、OSCE-R 後・臨床実習後・卒業後のアンケートとインタビューなど、多様な質的・量的データを収集し、高得点群と低得点群の比較や M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) などの方法を用いた分析がなされている。

これまで、医学 OSCE など、臨床実習前や卒業直前 (Advanced OSCE) の総括的評価としての OSCE を扱った研究・実践は数多く行われているが、本研究では、医療関連職種 of 2 年生、3 年生の段階で、OSCE をカリキュラムの中に組み込み、その形成的評価としての機能に着目して、パフォーマンス評価が学生の学びに与える影響を、実施直後、臨床実習後、卒業後にまでわたって詳細に調査したものであり、高いオリジナリティを有している。

本研究の内容と意義は、3 つの時間軸で捉えることができる。

第一は、OSCE-R・「考える OSCE-R」の基本構成である〈第 1 回 OSCE→映像によるグループリフレクション (ロールプレイ、教員等によるデモンストレーション、セミナーなどもあわせて実施) →第 2 回 OSCE→映像によるグループリフレクション〉の中での学生の学びである。ここでは、OSCE を 2 回繰り返すことで、映像によるグループリフレクション等の教育的効果が浮き彫りにされるとともに、OSCE が形成的評価として有効に機能することが示されている。また 3 年生の「考える OSCE-R」では、高得点群と低得点群の筆記試験・実技試験の結果の比較から、低得点群は、筆記では高得点群と同程度に臨床推論ができるにもかかわらず、検査測定などの臨床技能が未熟であるため、模擬的臨床場面では、正しい臨床推論が困難に

なることが明らかにされている。

第二は、OSCE-R・「考える OSCE-R」とその後の臨床実習という時間軸の中での学生の学びである。OSCE-R・「考える OSCE-R」はあくまでも模擬患者を対象に行われるシミュレーションであるが、臨床実習と組み合わせることにより、学生が実際の臨床現場でシミュレーションの限界を理解すると同時に、実験的な試行を繰り返し練習できるシミュレーションのよさも感じていることが、データによって示された。

第三の時間軸は、2 年次 OSCE-R・3 年次「考える OSCE-R」から卒業後にまで及ぶ初期の熟達化としての学生の学びである。OSCE-R・「考える OSCE-R」でのリフレクションは、行為の後の・行為についてのリフレクション（reflection-on-action）であるが、その繰り返しを経るなかで、臨床現場での実践において、彼らが習慣的に行為の中でのリフレクション（reflection-in-action）も行っていることが、明らかにされている。

このように本研究は、独自に開発した評価手法と長期間にわたって収集された量的・質的なデータによって、リフレクションと結び付けたパフォーマンス評価が理学療法士教育における学生の学びを促す上で高い効果をもつことを実証的に示したと評価することができる。

口頭試問においては、先行研究の検討範囲をさらに広げた上で本研究のオリジナリティをより明確化すること、数多くのリフレクションのツールや方法の中で本当に必要なものを絞り込むことによって実行可能性を高めること、ファシリテーターとしての教員の役割を可視化すること、OSCE-R と「考える OSCE-R」という 2 つの概念を 1 つの概念に統合する可能性について検討すること、「学び」と「熟達化」の概念を再整理することなどが指摘された。ただし、これらは、本研究を今後いっそう発展させていくための研究課題として、肯定的に解釈することができよう。

以上から、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 29 年 2 月 20 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降